

団体交渉報告

5月9日、2014年度春闘要求および、旧動燃・核燃料サイクル開発機構からの差別処遇に対する是正要求に関する団体交渉が、上塚労務担当理事出席のもとで行われました。交渉の概要についてはあゆみ速報 No.4939 (65-38)で報告した通りです。

以下に、交渉における主なやり取りを報告します。報告は、何回かに分けます。最初は人事制度の見直しと機構改革とに関わる部分です。

1. 2014年度賃金・労働条件改善要求について

<人事制度の見直しが強行実施されたことは、全く納得できない>

労組： 3月31日付けで回答書をいただきました。けれども、この回答書どころの話ではないところがあります。4月1日に機構改革と称して人事制度の見直しが強行実施されたことは、全く納得できません。それについてじっくりとお話します。

そもそも何故、改革が必要であったのかということを考えれば、どうして今回、機構が強行実施したような制度の変更になるのか。一つは「信賞必罰」です。それは、考えようによっては良いことなのですが、問題は本当に「信賞必罰」になるのかということです。その感覚が我々とかかなり違うのではないかと。誰かが評価する訳ですが、その評価がきちんと出来るのかということです。30年以上前の労働界では、そもそも「評価することがけしからん」という雰囲気があった。今は「評価するな」という話は、ほとんどありません。我々もそういう事を言っていない。評価することをベースに考えた時に、まず、成果主義と言われました。成果主義というのは、成果で評価する訳で、ちょっと、単純な評価とは違います。成果という事から、ある意味、目に見えたものです。あちこちの企業が、色々と鳴り物入りで行い、ほとんど失敗しています。それをまず頭に入れておかなければならない。評価の反映を全くやるなどとは言いませんが、やり方を間違えると、かえってマイナス要因になるということです。例えば自分がちゃんとやっているのに、悪い評価を付けられたら、当然、やる気がなくなります。自分と隣で同じ仕事をやって、どう見たってあいつ、大して仕事をやっていないのに、何だか知らないけれど、処遇が上げられた、ということになれば、普通の人は「納得できない」と文句を言うのです。だから、評価の仕方にしろ、処遇への反映にしろ、よくよく考えてやらなければならない。慎重にやらなければならない。誰がみても「非常に良い成績を上げた人」が、抜擢をされたり、あるいは4号アップのところを6号アップになっても、そんなに文句を言う人は多分いません。だが、「何んであいつが」となれば、文句を言う人が出て来るし、文句を言うだけなら良いのですが、問題は、やる気が無くなるという

事です。今回、改革が「もんじゅ」ですよ。違いますか。原研がサイクル開発機構と統合した際には、統合前から色々話し合いをして、「標準より低い評価に関しては、相対評価ではなく、絶対評価にする」ということで合意し、これまでやってきました。旧原研にも人事評価制度があったけれど、旧サイクルでやっていったような激しく差を付けるものではなかった。ただ、文句を言いたい事は、たくさんあります。当然、上げる者を上げてないとか、色々ありました。それは、後で触れる差別と無関係ではないと思っています。とにかくあまり激しい差別を付けてこなかった。今、「もんじゅ」のトラブルで強引に制度を変えたが、「もんじゅ」のトラブルは、何故起きたのか。そちらの考えを一番に聞きたいところです。評価によって処遇が甘かったから、起きたことですか。「J-PARC」にしてもそうですが、問題としては「もんじゅ」のほうが大きいので「J-PARC」は置いておきますが、どうなのですか。評価によって、ちゃんと差を付けなかったから、あるいは、甘い評価をしていたから、「もんじゅ」があのようなようになったのですか。

<「もんじゅ」は改革の端緒となっただけ、「機構は何をしている」という批判に応えるための改革>

理事： 「信賞必罰」という言い方はあまり好きではないのだけれど、「適切な人事評価」という言い方がまだ良いかと思うが、それをちゃんとやらなかったからであり、「もんじゅ」とは直接、関連していない。今回の改革では、確かに「もんじゅ」がハイライトとされているので、そこが重点という事で、全く異存はないのだけれど、基本的に原子力機構のガバナンスが効いていないという言い方もされているけれど、要は社会的にみて、「ちゃんとまともな仕事をやっているのか」とか、「本当に期待されている成果を上げているのか」というような原子力機構全体が批判を浴びていると思っている。そのような中で評価というの、ちゃんと仕事をやっている人は評価する。やっていない人は、それなりの評価をしなければならぬ、というところが徹底されていないと問われている。そういう意味で今度の人事評価制度を変えなければいけないという話になっている。だから「もんじゅ」と直接結び付けて話をされると、そこはちょっと違う。

労組： そんな話は、初めて聞きました。

理事： 機構改革の中で、「もんじゅ」とか「J-PARC」がきっかけになったというのは常に社会的に一番言われている話。そのように受け取っている人は多いのだけれど、少なくとも我々、経営の一員としては、例えば現場の職員と話をする機会などでも、「もんじゅ」とか「J-PARC」に限った話では全然ないという意識でやっている。

労組： それは、「もんじゅ」の話に巻き添えにしているだけではないか。

理事： そうではなくて、原子力機構の仕事というのは、外で見ると「アウトプットが何ですか」という話、具体的に原子力機構から出す事がどのように役に立っているのですかという見方で見られている。私なんかは、日頃、「原子力機構というのは何をやっているのですか」、「何の役に立っているのですか」という言い方で端的に言われる。

そこは、甘んじて批判を受けざるを得ないなど、中々、成果を上げられないという実態があると認識している。

労組： それでは、各部署に成果を上げるためにどうしろとあつてしかるべきでしょ。それは、あなたのところは、どういう成果を上げているのではなくて、成果を上げなさいと言っているのですか。

理事： 言っています。今、私が言った「各部署で色々な成果を上げなさい」、「それはきちんと評価につなげます」と言っているのは、どちらかと言えば、上のレベルでやっているマネジメントです。現場で装置を維持しているとか、技術開発をやっている人にとって、それは必死に頑張つてやっているのだけれども結果的にそれが目に見えるような成果に繋がらないからといって、酷い評価をする。そういうのは全然フェアではないから、そこまでは考えていない。

労組： そうは考えていないということは分かるのですが、何のために人事制度の見直しをするのかという事です。

<福島原発事故に関して、原子力機構としての反省とか、原子力業界として何が悪かったのか、そんな話は一切聞いた事はない。>

労組： 機構は改革すべきだと思っています。改革しなければならない事があると思っています。でも、それは「もんじゅ」のこととかもあるでしょうけれど、やっぱり一番の問題は、原発事故ではないのですか。

理事： 原発事故は大きいです。

労組： 大きいでしょう。だけど、改革の話ではそんなものは無いではないですか。福島対応をやりましょうというだけでしょ。事故に関しては、頬かむりしている。これまでも、全然、それには一切触れたくないという感じでした。

理事： 頬かむりなんかしていない。それは、原発事故に関しては、それに携わってきた我々は、極めて責任が大きいと思っている。

労組： 思っているかも知れないが、これまでは何の話も表現も無かった。上塚さんが初めてです。

理事： そこは、理事長も反省も込めて盛んに明確に述べている。それは私の話では無く、共通の認識と思っている。

労組： 松浦さんに代わってから、原子力機構の上層部というか中層部を含めてそうやってきたのかも知れませんが、

理事： 鈴木前理事長の時代も明確にそう言っていました。

労組： 全然、聞こえてこない。それは、形のうえで、謝罪みたいなものはありました。でも、原子力機構としての反省とか、原子力業界として何が悪かったのか、そんな話は一切聞いた事はない。事故だつて「誰もが予想していない事が起きた」と言っている。だから、そういう意味での反省がないです。同じ業界の中で起きた事故だから、何か反省が無いといけないから言っている、みたいですよ。

理事： 色々な局面で言っている。ただし、それが何か文字にしたりとか、何かメッセージを発するとかいう形ではないけれども。新入職員の入社式とかで理事長のメッセージとか、それに類したことは言っている。

労組： 言っています。しかし、原研なり、原子力がこういうふうにはまらなかったという発言ではないです。「専門家が、誰もが考えなかった事が起きたのだ」という言い方をしている。そんなのは嘘でしょ。警告する人がいたのだから。

<仕事をちゃんと進めるために何が必要か。>

労組： 問題は、仕事をちゃんと進めるために何が必要か。そのために人事制度なり、人事管理なりが、何が出来るのか出来ないのか、あるいはやってはいけないのかという事です。今回の見直しは、やってはいけない事をしていると思っている。

「もんじゅ」では、何で点検出来ないのか色々調べている人がいるそうで、「これこれ点検出来ないです」と言ったら「そんな事は言うな」と言われたそうです。点検できないという事を、「待ってくれ」というのでなく、「そんな事を言うな」と言われたそうです。それが、世間で点検出来ない事が騒がれて、規制委員会に叱られて、機構としてはちゃんと点検を行うという方針が変わったら、今度は、そんな事を言うなどと言った人達が、わーつと「点検、点検」となったそうです。それを調べた人は、原子力をあまり知らない人だから凄く不思議がっていました。何故そんなに急に変わるのですかと。要するに技術的な形式とか理念とかを持って、ちゃんと仕事をしていない人が上に居るのです。今は知りませんよ。当時は居たのです。今だつて、居ると考えてしかるべきでしょ。人が全部、入れ替わっている訳ではないのだから。それで、そういう中で、その人事評価によって、えらく差が付く事になったら、下の者から何か言えないでしょう。そうは思わないのですか。

以下、次号以降で報告します。

機構本部機能の移転

長堀住宅跡地（東海村舟石川と村松にまたがっている）に建設を予定していた総合管理棟の建設（あゆみ速報 No.4911(65-10)を参照下さい）がいよいよ本格化するようです。総合管理棟は制震構造の本部（延べ床面積 6000m²）と災害時等に即応センターとなる免震構造の別館（延べ床面積 2000m²）の他、資機材庫と車庫を備えており、4月16日に着工しました。完成は、来年の3月31日までの予定です。入居は2015年4月以降となるようですが、完成すれば、本部機能が集約され、400人程度の職員が働くこととなります。